

## 第41回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) 大会報告

英文学科長 和氣 節子

今年度も例年同様11月の最終金曜日に英文学科卒業生、大学院生、大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の促進を目的とする英文学科主催の学会、第41回英語英文学会 (KCSES) を開催した。今年度の学会準備担当はグローバル・スタディーズコースで、国際移住機関 (IOM) 駐日事務所、プログラム・マネージャーの清谷典子氏 (Ph. D) から、「人の移住と国際移住機関の活動」という題目で特別講演を伺う貴重な機会を得た。2016年9月に人の移動 (移住) の問題を専門的に取り扱う唯一の国連機関となったIOM が直面する課題を、清谷氏が実際に関わってこられたアフリカ諸国 (ケニヤ、ソマリア、ジブチ、ルワンダ) での多様なIOMの活動具体例をふまえて知ることができた。多くの聴衆一人一人が、トランプ米大統領の政策、イギリスのEU離脱や、最近の欧州でのポピュリズムにみられる〈ニューナショナリズム〉のなかで、「移民と社会の双方に利益をもたらす人の移動」を保証する政策に関し、自分なりのスタンスを持って発言できる貴重な見識が与えられ、大変嬉しく思っている。

学会前半部には、英文学科を3年前に卒業後、更に各自の研究テーマに応じた進学先で研鑽を積んだ3名 (E131) の意欲的な研究を聴いた。発表者 (ABC順) とタイトルは以下のとおりである。安保夏絵氏 (大阪大学博士後期課程在学中、修士) 「変容するV.、混濁のV. - V. に見るサイボーグ・フェミニズムの可能性」、西川美咲氏 (大阪教育大学大学院修士課程修了、修士 (教育学)) 「生徒の自尊心を高めることに焦点をあてた授業実績」、高橋未希氏 (ロンドン大学UCL現代ヨーロッパ研究修士課程修了、MA) “Muslim Migrants in Contemporary Germany”。現在の英文学科、3コース (英米文学文化、言語コミュニケーション、グローバル・スタディーズ) それぞれの研

究発展の可能性を示した発表は、聴衆を知的に刺激する内容の濃いものであった。今後の活躍を期待できる卒業生との嬉しい再会の時間も、教職員にとってKCSESの醍醐味のひとつである。当日、ご参加くださった旧教職員、並びに他学科の先生がた、会員の皆さまに御礼申し上げます。

## 特別講演

### 『人の移住と国際移住機関 (IOM) の活動』

IOM駐日事務所 プログラム・マネージャー 清谷 典子

#### 世界における移民の現状

世界には国内移住者を含めて10億人の移民 (migrant) がいると推計されており、今日、7人に1人が移民である。10億人のうち、国境を越えた移動を伴う国際移民は約2億5,000万人に上り、残りの約7億5,000万人は国内移住者である。国際移民の数自体は、有史以来最も多くなっているものの、全世界の人口における国際移民の割合を見ると3%程度の一定の割合を保っている。



移民は、歴史上、労働力不足の解消、多様な人材の確保、技術・知識の移転等により、経済成長の維持・向上や活力ある豊かな社会の形成に、常にポジティブな影響をもたらしてきた。世界の総人口が増え、紛争や気候変動があり、グローバル化の進む中、人の移動の増加は避けられない、そして、社会の

恒久的発展に必要な現象である。移民の中には難民など迫害や紛争を逃れた人々、労働者、密入国者、人身取引被害者、搾取の被害者、子ども、妊婦、病人、老人など、様々な人が含まれており、全ての移民の人権を保護し、ポジティブな影響を高めるためには、受け入れ社会、送り出し社会、移民本人のリスクを軽減していく必要がある。

### IOMの活動

国際移住機関（IOM）は、1951年に設立された人の移動（移住）の問題を専門に扱う国際機関で、「正規のルートを通して、人としての権利と尊厳を保障する形で行われる人の移動は、移民と社会の双方に利益をもたらす」という基本理念に基づき、今日、数多くのプログラムを実施している。

移住・移民に関連するプログラムは多岐にわたり、難民の第三国定住支援、帰国の意思を持ちながらも経済的な理由などでその願いを果たせずにいる非正規移民などへの自主的帰国及び社会復帰支援、人身取引被害者への支援、労働移住者への支援などの移住関連サポート、各国政府への出入国管理能力の強化支援、紛争や災害の避難民への支援、調査・研究などに取り組んでいる。IOMはパートナーシップを重視しており、必要に応じた様々な活動を各国政府、国際機関、NGOなどのパートナーと共にやっている。

### 日本におけるIOMの活動

1980年代のインドシナ難民支援がIOMの日本における活動の始まりで、近年では、日本を取り巻く人の移動の変化に対応した取り組みへと拡大している。

2005年には、人身取引対策事業を始め、日本で外国人被害者が保護された後、十分な情報に基づく自主的意思で帰国したいと希望した場合、被害者の身の安全と人権を保障したうえで、帰国支援を行っている。加えて、帰国後に社会復帰できるよう、希望に応じて医療、教育、住居、起業などの持続的な自立に向けての支援も提供している。

また、2010年からは、日本政府の要請を受け、タイやマレーシアに滞在する難民の第三国定住の受け入れに係る、難民の出国準備、および日本までの移送等を支援している。具体的には、健康診断や生活ガイダンス・初級語学研修、滞在国内からの出国許可の取り付け、航空券の手配、空港までの移送、搭乗の補助等を行っている。日本は東南アジア

からアメリカやカナダなどに移住する多数の難民の経由地でもあるため、成田空港で乗り継ぎのアシストも実施している。

さらに、2013年からは、帰国の意思を持ちながらも経済的な理由などでその願いを果たせずにいる人たちに対して、人道的な帰国方法、及び、帰国後の社会復帰支援を提供している。

過去には、定住外国人の子どもの就学支援（2009－2015年）や東日本大震災で被災した移民のための人道的帰国支援（2011年）等も実施した。その他、移住に関する対話を推進するため、移民の社会統合後の在り方などをテーマにしたシンポジウムを外務省と共催するなど、様々なフォーラムや講演を行っている。

### これからの課題

移住・移民は、これからも増加すると考えられ、今後も人口問題やグローバル化に関連付けられていく課題である。対応は包括的である必要があり、送り出し社会での災害リスクの軽減、受け入れ社会での教育・社会福祉サービスへの平等なアクセス、雇用システムの透明性と公平性の確立、多様な正規移住ルートの確保、そして、送金コストの削減なども含まれるが、こういった対応は、持続可能な開発目標（SDGs）にもあるように、発展途上の段階にある。また、経済が停滞する中、既存の国内労働力との競合や治安の悪化への懸念等、及び、一部のメディアや公の場での極端に否定的な語り口から、大規模な反移民感情が生じている地域もあり、外国人排斥を引き起こしかねない展開も見られる。移住は、家族の離散を含む社会ネットワークの喪失、及び、言葉や文化の壁等を伴うことも多く、現状では、移民が搾取、孤立、差別等の困難に陥る可能性は相対的に高い。

IOMは、2016年9月に国連の関連機関となったが、これまでの経験やノウハウに基づいたプログラムの実施や技術の提供などの実務を担うと同時に、移住・移民に関する調査や政策提言などを積極的に行い、人の移動の問題を専門的に扱う唯一の国連機関として課題に取り組んでいく。

## 発表要旨

### 変容するV.、混濁のV.

#### —V.に見るサイボーグ・フェミニズムの可能性

安保 夏絵

(E131、大阪大学大学院言語文化研究科  
言語文化専攻博士後期課程在学中、修士)

ポストモダン文学の巨匠として知られるトマス・ピンチョンは、『V.』(1963年)で様々な姿に変容しサイボーグ化あるいは無機物化する女性レディVを描いている。本作品では、主人公のハーバート・ステンシルが一人称の語りをあえて三人称で語り、彼の父もまた女装してV.に接近しようと試みる。自分自身をまるで第三者であるかのようにしたてあげて語るステンシルは、歴史よりもはるかに恐ろしいものとして女性の軌跡を残すV.を客観的な視座から見ようとする。またもう一人の主人公ベニー・プロフェインもステンシルに関わるようになり、彼は現代を生きる女性の整形や自らの無機物化を恐れるようになる。このようにV.を語るステンシルとプロフェインが世界大戦期と1950年代のアメリカを生きる女性のサイボーグ化に着目した視点を交差させることで、『V.』はサイボーグ・フェミニズムの可能性を秘めた作品であると言える。

## 発表要旨

### "MUSLIM MIGRANTS IN CONTEMPORARY GERMANY"

高橋 未希

(E131、ロンドン大学UCL  
現代ヨーロッパ研究修士課程修了、MA)

This presentation aims at exploring how the stereotypes of Muslim migrants living in contemporary Germany have changed. Using data obtained from opinion polls and surveys, my argument is that the stereotypes and descriptions of Muslims living in Germany have always been negative - a tendency that became more obvious and hostile after the 9/11 terror attacks. The perception that they are a threat to contemporary Germany is due to the focus on their fundamental ethnic and religious

differences from mainstream German society, and this focus shows the extent of the role and influence played by the German mass media.

## 発表要旨

### 「生徒の自尊心を高めることに

#### 焦点をあてた授業実績」

西川 美咲

大阪教育大学付属池田中学校 英語科  
(E131、大阪教育大学大学院教育学研究科  
英語教育専攻修士課程修了、修士(教育学))

昨年11月25日、神戸女学院大学英語英文学会にて私の研究発表の機会を頂きました。4年生在学時に1回、卒業した翌年もこの学会に参加しましたが、まさか自分が、お世話になった先生方の前で発表する機会を頂けるとは思っておりませんでしたので、驚くと同時に、非常に嬉しく思いました。

この研究は私の修士論文の内容です。日本の中学校英語の検定教科書を用いながら、英語の授業での活動を通して、生徒の自尊心を上げることを目標としました。思春期の不安定な時期である子どもたちに、「自己理解」「他者理解」「つながり」をキーワードに学校の英語の授業だからこそ可能な活動を提案し、心理学の分野で用いられている自尊感情尺度のアンケート結果を元に分析しました。本研究は大学院在籍時に行ったもので実践期間が短かったことから、顕著な自尊心の向上が見られませんでした。先生方からは今後、より長期のスパンで実践を行い、また他教科との関連性を研究してみたいという有意義な示唆を頂きました。

私は現在、神戸女学院大学に入学したところからの夢でもあった中学校の英語教員として教壇に立っています。英語科教育法で学んだことが全ての基礎になっており原点です。今後も変化を続ける日本の英語教育に貢献できるよう、更なる研鑽を積んでいきたいと思っております。

## 国際学会発表

### \*Shawn BANASICK 氏

“That’s What You Think! : An Exploration of Real-Time Q-Methodology as a Pedagogical Tool in an EFL Classroom.”

アメリカ、ニューオーリンズで開催された32nd Meeting of the International Society for the Scientific Study of Subjectivity (2016年9月7-10日)にて研究発表。

### \*別府恵子 氏

“Henry James and Modern American Poets.”

アメリカ、ブランダイス(Brandeis University)で開催されたヘンリー・ジェイズ没後百年記念国際学会(2016年6月9-11日)にて研究発表。

“The Claims of Art and of Social Duties: Hyacinth’s Choice in The Princess Casamassima and Henry James.”

フランス、パリ(The American University of Paris)で開催された第3回ヨーロッパ・ジェイズ学会(2016年10月20-22日)にて研究発表。

### \*Marcelo FUKUSHIMA 氏

“Labor Specialization and Endogenous Firm Heterogeneity.”

台湾、台湾国立大学で開催されたAsia Pacific Trade Seminar 2016(2016年6月23-26日)にて研究発表。

### \*石川有香 氏

“Use of Model Verbs in Academic Discourse: Comparison between Professionals and Graduate Students in Science, Technology and Engineering.”

チェコ、Masaryk大学で開催されたBrno Conference on Linguistics Studies in English, (2016年9月12-13日)にて研究発表。

“Development of English vocabulary list for engineering students.”

中国、北京(Beihang University)で開催されたAsia Pacific Corpus Linguistics Conference(2016年10月21-23日)にて研究発表。

“Gender-stereotypes in English textbooks used in Korea and Japan.”

韓国、ソウル(Sookmyung女子大学)で開催されたKorea Society of Sociolinguistics(2016年11月12日)にて研究発表。

“Cultural identity and English as a Multi-lingua Franca.”

スペイン、Lleida(Lleida大学)で開催されたInternational Conference of English as a Lingua Franca (2016年6月27-29日)にて研究発表。

### \*古村敏明 氏

“Ekphrasis and Empathy: Responses to Distant Loss in Contemporary American Elegies.”  
アメリカ、ハートフォードで開催されたNorth-east Modern Language Association, 47th Annual Convention (2016年3月17-20日)にて研究発表。

“Translation of Travel Poems: Elizabeth Bishop’s Geography III and Tanikawa Shuntaro’s Journey.”

アメリカ、ハーバード大学で開催されたAmerican Comparative Literature Association, 2016 Annual Meeting (2016年3月17-20日)にて研究発表。

“Imagination of Peace: Pacifism beyond the Antiwar in Modern American Poetry.”

アメリカ、フィラデルフィアで開催されたThe 132nd Modern Language Association Annual Convention (2017年1月5-8日)にて研究発表。

### \*Monika KSIENIEWICZ 氏

“Gender (In) Equality in Japan.”

インドネシア、バリで開催された3rd International Conference on Social Science (2016年9月19-20日)にて研究発表。

“Issues of the Comfort Women as an Example of Gender Inequality in Japan.”

オーストラリア、シドニーで開催された2016 IEDRC Conference(2016年11月24-26日)にて研究発表。

### \*奥本京子 氏

“A Challenge to Transform Historical Conflict in Northeast Asia: Combining Circle Process and Ho’o Pono Pono.”

カンボジア、シエムリアップ(Regency Angkor Hotel)で開催されたPeace Practitioners’ Research Conference “Revisiting Reconciliation-Making it Real”(2016年11月25-26日)にて研究発表。

### \*齋藤安以子 氏

“Cultivating Fundamental Competencies for Working People through Drama in English Education.”

台湾、台北(実践大学)で開催されたThe 10th International Conference on English Education (2016年4月23-24日)にて、塩澤泰子教授(立教大学)・草薙ゆか教授(鶴見大学)と共同研究発表。

“Not Madness, but Reason and Emotion.”  
[*Hamlet* の文体論研究]

英国、ロンドン大学で開催されたInternational Association of University Professors of English [IAUPE] Triennial Conference 2016 (2016年7月25-29日)にて研究発表。

### \*立石浩一 氏

“More Arguments against Japanese as a Mora Language.”

アメリカ、ソルトレイク(The Salt Lake Public Library)で開催されたThe 34th Annual Meeting of West Coast Conference on Formal Linguistics (2016年4月29日-5月1日)にてポスター発表。

“Perception on Contrastive Focus by L2 Learners.”  
イングランド、ケント大学で開催されたTIE 2016(Tone and Intonation in Europe) (2016年9月1-3日)にてShinobu MIZOGUCHIとTim MAHRT氏と共同研究発表。

### \*Goran VAAGE 氏

“The Prestige of the Osaka Dialect in Contemporary Japan.”

スペイン、ムルシア大学で開催されたSociolinguistics Symposium 21 (2016年6月15-18日)にて研究発表。

“Cultural Linguistic Aspects of Japanese Humour.”

イタリア、プラートで開催された The First International Conference of Cultural Linguistics (2016年7月20-22日)にて研究発表。

“Can the Study of Subcultures Be Used to Explain and Teach Changes, Variation and Distribution in Contemporary Japanese Society?”  
インドネシア、バリで開催された「2016年日本語教育国際研究大会」(2016年9月9-10日)にて研究発表。

### \*Corey WAKELING 氏

“‘The Comic Scenario, Towards a Commons’ ‘No Colony Can Con’.”

アメリカ、バークレー (University of California)で開催されたActive Aesthetics(2016年4月14-19日)にて研究発表。

## 会員による出版紹介

### ◇別府恵子 氏

「ヘンリー・ジェイムズ、〈空間／時間の移動〉、〈リタラリー・ナショナルリティ〉」『ヘンリー・ジェイムズ、いま：ヘンリー・ジェイムズ没後百年記念論集』里見繁美・中村善雄・難波江仁美編著(英宝社、2016年9月5日) pp. 353-371

### ◇風呂本惇子 氏

『共和国のロマンス』(リディア・マリア・チャイルド著、監訳、新水社、2016年3月刊)

### ◇石川有香 氏

『言語研究と量的アプローチ』(共編著、金星堂、2016年3月刊)

### ◇奥本京子 氏

「ジェンダーからみた安全保障：二次論を超えて」『18歳からわかる 平和と安全保障のえらび方』(共著、大月書店、2016年1月20日) pp. 180-186

「紛争解決の条件『共感』の欠如」『「慰安婦」問題・日韓「合意」を考える：日本軍性奴隷制の隠ぺいを許さないために』(共著、彩流社、2016年3月30日) pp. 84-85

「紛争解決と安全保障：ファシリテーションとメディアエーションの役割とは何か」『国際共生と広義の安全保障』(共著、東信堂、2017年) pp. 49-75

### ◇和氣節子 氏

“Contemplating Genius: Coleridge on Shakespeare” (*Poetica* 85. Coleridge, *Contemplation, and Cultural Practice*. Maruzen-Yushodo 2016) pp. 75-95

◇Corey WAKELING 氏

“Pacific Rim: Indifferent Pastoralist.”  
*A TransPacific Poetics*, ed. Lisa Samuels  
and Sawako Nakayasu (Brooklyn: Litmus Press,  
2017). (book chapter)

“Lionel Fogarty as a Literary Critic after  
the Postcolony.” *Plumwood Mountain* 3.2, [http://plumwoodmountain.com/lionel-fogartys-  
literary-criticism-after-the-postcolony/](http://plumwoodmountain.com/lionel-fogartys-literary-criticism-after-the-postcolony/).

“John Forbes’s ‘Miraculous Fluidity’.” *Cordite  
Poetry Review* 54 (May 2016), [http://cordite-  
ite.org.au/essays/miraculous-fluidity/](http://cordite.org.au/essays/miraculous-fluidity/), n.  
pag.

“Anxiety and Antigone: an introduction to  
Gig Ryan’s New and Selected Poems (2011).”  
reprinted in Copyright Agency: Reading Australia  
teaching resource, <http://readingaustralia.com.au/essays/new-selected-poems/>, n.  
pag.

“Lingo Surprise,” *The Fremantle Press Anthology of Western Australian Poetry*, ed. Tracy  
Ryan and John Kinsella (Fremantle: Fremantle  
Press, 2017), 330-332.

“The Californian Poppy,” *Flash Cove* 3, 1-3.

“Alfresco Dining Area Dining Alfresco,” *Flash  
Cove* 3, 4-6.

“The New Poet,” *Flash Cove* 3, 7-10.

“Élan Vital,” *Cordite Poetry Review* 55, n. pag.

“On the Occasion of Gig Ryan’s Sixtieth  
Birthday,” *Overland* 225, p. 58.

“Your Karma, Australian,” in *Writing to the  
Wire*, ed. Dan Disney and Kit Kelen, 202-204.

“Reactor of the Tiny Minutes,” in *Active  
Aesthetics: Contemporary Australian Poetry*,  
ed. Daniel Benjamin and Claire Marie Stancek  
(Berkeley and Artarmon: Tuumba Press/Giramondo,  
2016), 190-192.

“Reform,” in *Active Aesthetics: Contemporary  
Australian Poetry*, ed. Daniel Benjamin and  
Claire Marie Stancek (Berkeley and Artarmon:  
Tuumba Press/Giramondo, 2016), 193-196.

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトの  
コンテストを開催することとなり、今年度も担当  
教員からの推薦による応募を受けつけた。全体で  
は18名の応募があり、2月に英米文学、英語学、  
グローバル・スタディーズ、通訳・翻訳の各部門  
で選考が行われた。最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者  
は次の通り。なお、最優秀者の論文は、『優秀卒業論  
文・プロジェクト集』（2017年度春刊行予定）に掲  
載する。

英米文学（応募者数 4名）

<最優秀賞>

E13003 赤坂 香緒里  
E13044 石倉 綾乃  
E13062 小林 雪乃

<優秀賞>

該当者なし

英語学（応募者数 3名）

<最優秀賞>

E13009 浅野 優衣

<優秀賞>

E13042 井上 綾子

グローバル・スタディーズ（応募者数 8名）

<最優秀賞>

E13014 藤本 洋子  
E13056 嘉藤 萌

<優秀賞>

該当者なし

通訳・翻訳（応募者数 3名）

<最優秀賞>

E13024 橋間 智奈美

<優秀賞>

E13057 加藤 夢乃

## 記念賞

2016年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与されました。

<b>タルカット記念賞</b>	E14004	有井	まりの
<b>デフォレスト記念賞</b>	E14010	江口	万葉
<b>大島初枝記念賞</b>	E14029	飯盛	祐子

## 神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)  
(2005年 9月 22日改訂)  
(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称  
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的  
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成  
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士生有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動  
年一回、英語英文学会大会を開催する。  
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。  
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

### 内規

#### I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSES運営委員会で審査の上、決定する。

#### II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3) に関しては、KCSES専用の口座を利用する。



## 編 集 後 記

よりグローバル化した社会の実態を反映させるべく、KCSESとして新たなスタートを切って以来、無事6年が過ぎました。今後とも何卒変わらぬご支援の程よろしくお願ひ申し上げます。

会員国際学会報告・出版物のご連絡、ありがとうございました。会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、今後の益々のご研究のご発展をお祈りいたします。

## *KCSES Newsletter*編集委員

(2016年度運営委員)

○古村敏明 ○TSUDA Yolanda ○和氣節子 (ABC順)

## *KCSES Newsletter No. 32*

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2017年3月発行